

第3章 資料報告

第1節 浅間古墳と古墳時代前期の東日本

滝沢 誠

皆さんこんにちは。筑波大学の滝沢 誠と申します。今回は、2019年から2020年にかけて埋葬施設の地中レーダー探査と墳丘の空中レーザー測量が行われた、富士市増川の浅間古墳の調査成果について報告する「浅間古墳調査成果報告会」にあたり、「浅間古墳と古墳時代前期の東日本」と題してお話しをさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

さて、今回の話は大きく三つのテーマから構成されています。まずはその点について説明しておきたいと思います。

まず一つ目は、浅間古墳の認識についてです。これまで浅間古墳についてはどのような調査が行われ、浅間古墳はどのように考えられてきたのか、という点についてお話ししたいと思います。また、浅間古墳は前方後方墳として知られているわけですが、そもそも前方後方墳とはどのような古墳なのか、この点について簡単にふれてみたいと思います。

二つ目は、近年調査が進んで以前とはだいぶ理解が変わってきた、駿河・伊豆の前期古墳についてお

話ししたいと思います。沼津市高尾山古墳の調査はたいへん有名になりましたが、それだけではなく、近年になって東駿河と伊豆の地域では、これまで知られていなかった前期古墳が確認され、調査が行われています。こうした調査の成果について取り上げてみたいと思います。

そして三つ目に、浅間古墳はいわゆる大型の前方後方墳に位置づけられるわけですが、こうした大型の前方後方墳にはどのような特徴があり、どういった性格をもっているのか、この点を少し広い視野から考えてみたいと思います。

I 浅間古墳の認識

戦前の理解

それでは、一つ目のテーマ「浅間古墳の認識」について話を進めていきたいと思います。

写真1は、1930年に刊行された古い『静岡縣史』の第1巻に掲載された浅間古墳の写真です。近代以降、浅間古墳が公式な書物の中に登場する古いものとしては、1921年に刊行された『静岡縣史蹟名勝

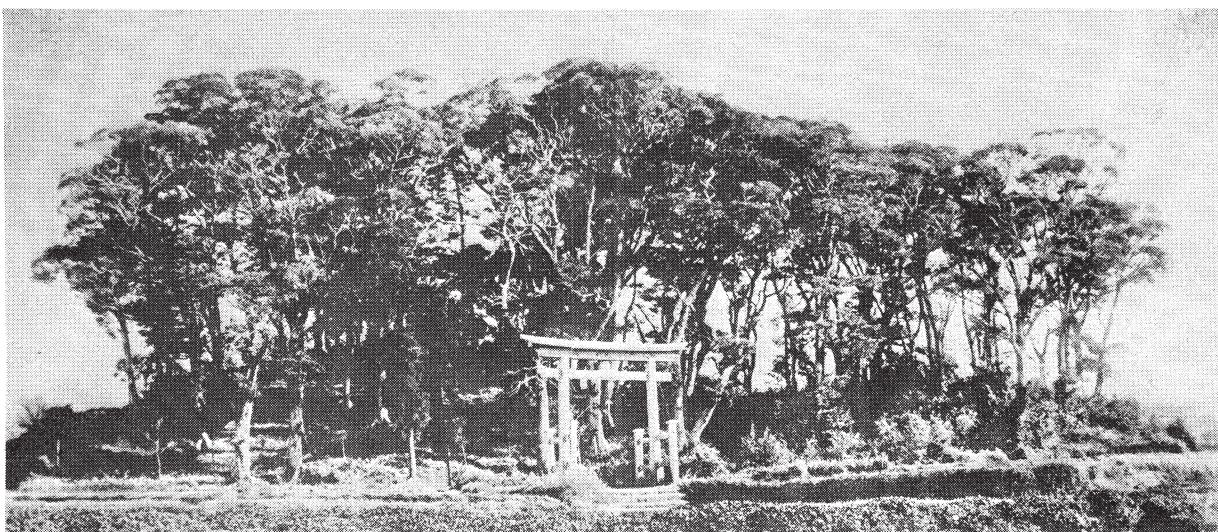


写真1 『静岡縣史』第1巻（1930年）に掲載された浅間古墳の写真

誌』があります。そこには、浅間古墳が前方後円墳であること、埴輪が出土したことなどが記されています。また、それから6年後の1927年には『静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』が刊行されます。そこにもやはり浅間古墳についての記述が見られます。さらに、3年後の1930年に刊行された『静岡県史』にも浅間古墳についての記述が見られるわけですが、これらにかかわったのは足立鉢太郎という人物です。

前方後方墳としての評価

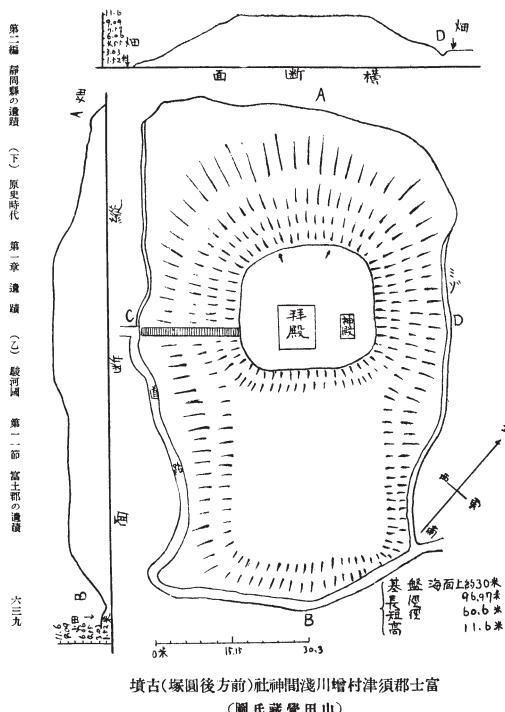
第1図は、『静岡県史』第1巻に掲載された浅間古墳の図です。その編纂にあたった足立鉢太郎は、浅間古墳を全長97mの前方後円墳として記述しました。それからだいぶ歳月が流れた1957年になり、浅間古墳が国の史跡に指定されることとなりました。その際、正確な測量図が必要であるということになり、当時静岡大学にいらした内藤晃先生が浅間古墳について初めての本格的な測量調査を実施されました。その成果は「遠江・駿河の前方後方墳」と題する論文にまとめられていますが、そこに掲載された測量図が第2図です(内藤1958)。その論文

の中で内藤先生は、浅間古墳が全長103mの前方後方墳であることを初めて指摘されました。つまり、この内藤先生の調査によって、浅間古墳は前方後方墳として広く認識されるようになったのです。

内藤先生はこの論文の中で、墳形のことだけではなく、浅間古墳には墳丘の表面に石を貼り付けたような、いわゆる葺石が存在すること、ただし埴輪はともなわないらしいこと、さらに古墳の年代は同じ富士市内にある東坂古墳に続く古墳時代中期の初頭頃であるということを指摘されています。この成果はすぐに学界に伝わり、同じ年に編纂された『吉原市の古墳』という報告書では、明治大学にいらした後藤守一先生が早速その成果を取り上げられて、浅間古墳は4世紀の終わりから5世紀の初頭頃に築かれた古墳で、年代的には東坂古墳(後述)に先行し、駿河の国では最古の古墳であろうとの考えを示されました(後藤1958)。

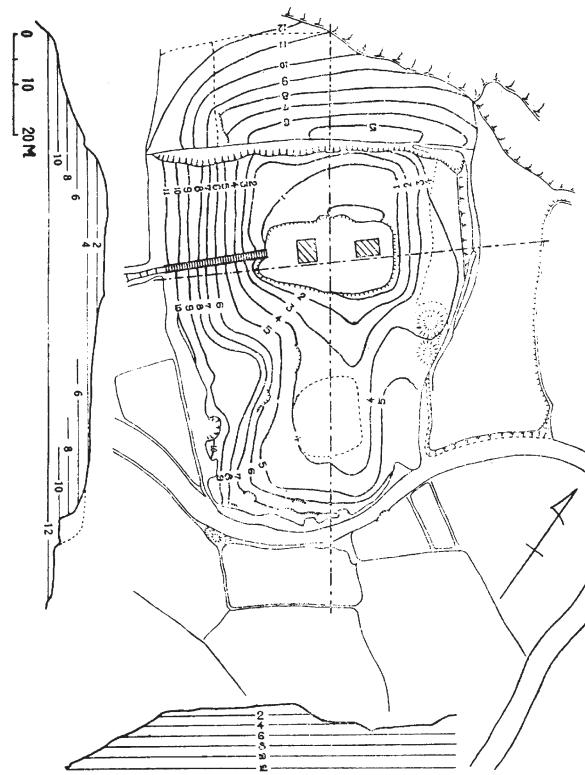
再測量調査

内藤先生による調査からおよそ40年後、静岡県が県内の重要遺跡を調査することになり、その中で静岡大学考古学研究室が浅間古墳の測量調査をあら



第1図 『静岡県史』第1巻(1930年)に掲載された

浅間古墳の図



第2図 内藤晃による測量図(1958年)

ためて行いました（静岡大学人文学部考古学研究室 1998）。当時私は静岡大学に在職していて、この調査にかかわらせていただきました。その成果として得られたのが第3図です。この測量調査の結果、浅間古墳は全長約90mの前方後方墳に復元されることがわかりました。また、その平面形態は非対称形のプランをもっていることが明らかになりました。第3図で見ますと、南側が平野側、すなわち海側になります、北側が山側、すなわち傾斜の高い側になりますが、南側の方の墳丘が大きく造られている、非対称形の平面プランをもつことがわかったのです。当時は1ヶ月くらいかけて測量調査をしたわけですが、その中で墳丘の表面には所々に石が見られたことから、おそらく葺石が存在するであろう、ただし埴輪は存在しないであろう、ということも再認識できました。そして最終的に、浅間古墳は90m規模の前方後方墳としては前方部が比較的短く、大型の前方後方墳としては古い形態を残したものであろうと考えるに至りました。

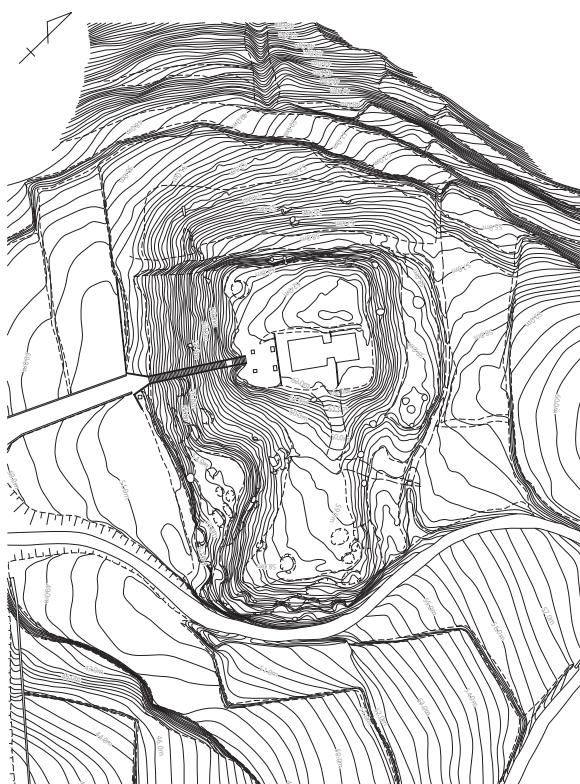
いまお話ししたように、浅間古墳は当初は「前方後円墳」と考えられていましたが、内藤晃先生の調査によって初めて「前方後方墳」であることが確

認され、今日に至っています。そして、2019・2020年に実施された富士市による最新の調査によって、その姿がさらに詳しくわかつてきたのです（本書第3章第2節参照）。

前方後方墳事始

ところで、前方後方墳とはどのような古墳なのか、この点について少し説明を加えておきたいと思います。写真2は、栃木県大田原市にある下侍塚古墳で、墳丘長約84mの前方後方墳です。写真の左側が後方部、右側が前方部になります。この古墳のすぐ近くには同じく前方後方墳である墳丘長約114mの上侍塚古墳が存在します。これら二つの古墳は、日本の考古学史上、とても有名な古墳です。なぜならば、これらの古墳は、江戸時代の1692年、元禄5年に徳川光圀が家臣を遣わして学術的な目的で初めての発掘調査を行った古墳だからです。この上侍塚古墳と下侍塚古墳は、当時は「上車塚」「下車塚」と呼ばれていて、当時の調査の記録が写真3に示したような『湯津神村車塚御修理』という古文書として残っています（斎藤1979）。

写真3には、二つの古墳を当時の人人が上から見た図として描いたものが認められます。これを見ますと、当時からこの二つの古墳は四角（台形）と四角（台形）を繋いだような形として認識されていたことがわかります。当時はまだ前方後方墳という言葉はないのですが、それにつうじるような認識が当初の段階からあったことをうかがわせるものです。今日、上侍塚古墳と下侍塚古墳については、第4図に示したような墳丘測量図が作成され、前方後方墳であることが確かめられています（小川町教育委員会2003）。当時の発掘で埋葬施設から出土した副葬品については、この古文書の中に絵図として残っていますが、調査後に埋め戻されたため現在は見ることができません。下侍塚古墳については、その後地元の教育委員会によって発掘調査が行われて、古墳とともにみられる土器が出土しています。それらの内容を総合すると、両古墳は古墳時代前期の終わりの頃に築かれた大型の前方後方墳であると考えられます。



第3図 静岡大学考古学研究室の測量図（1998年）



写真2 栃木県大田原市下侍塚古墳

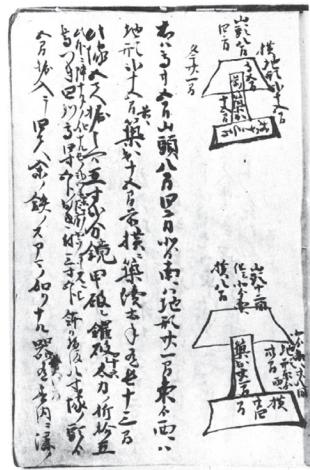
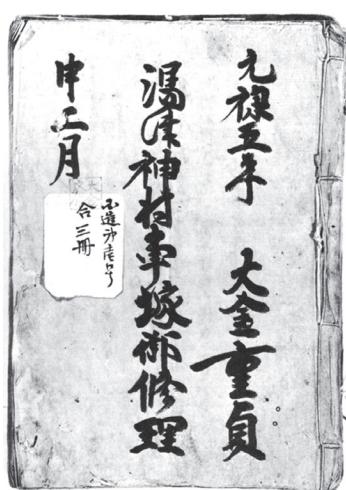
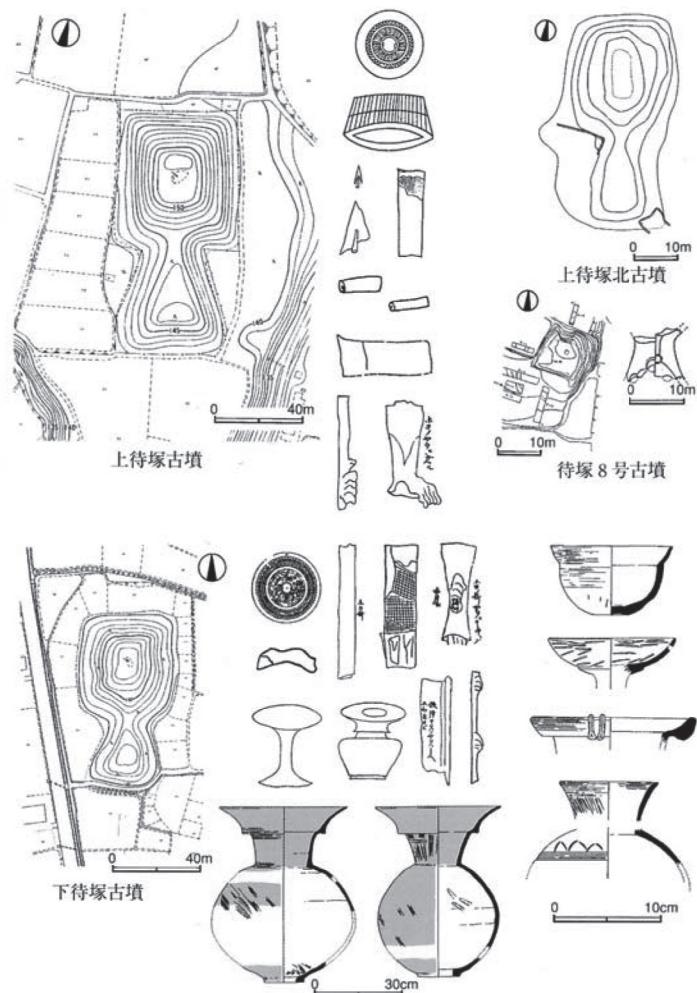


写真3 湯津神村車塚御修理（1692年）



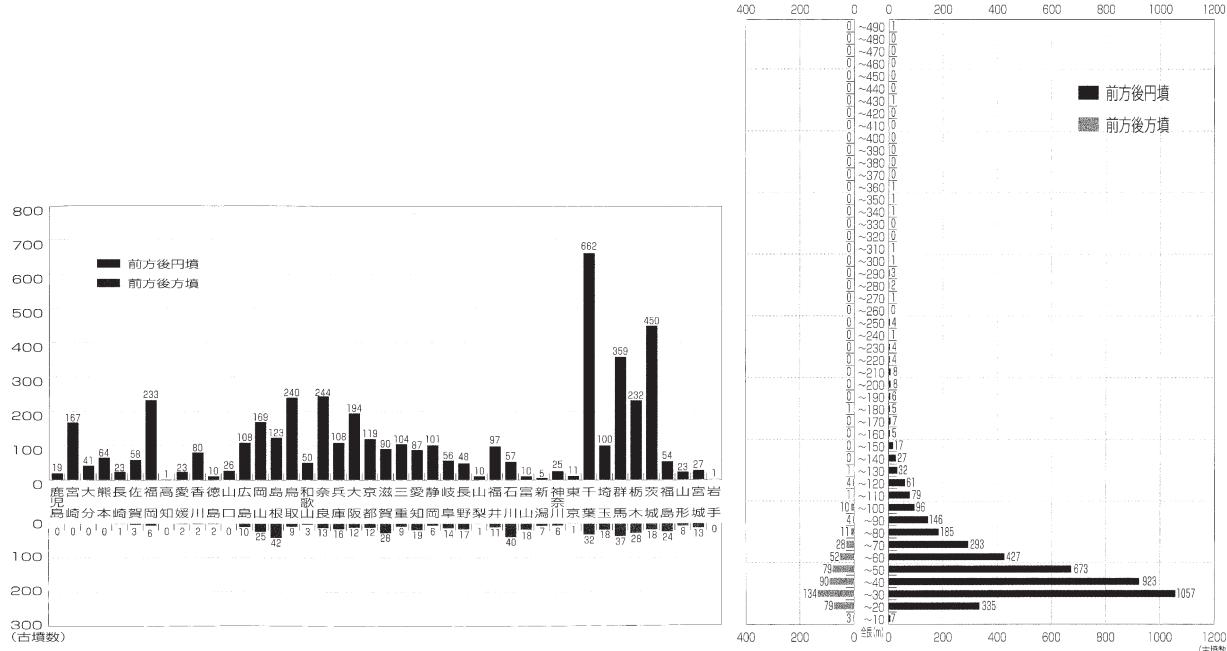
第4図 上侍塚古墳・下侍塚古墳などの墳丘と出土遺物

前方後円墳と前方後方墳

第5図は、2004年に奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が前方後方墳についての特別展を開催した際のカタログに掲載されたグラフです（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004）。二つのグラフに分かれていますが、左側のグラフは都府県別に示した前方後円墳と前方後方墳の数です。また、右側のグラフは、前方後円墳と前方後方墳の数を規模別に示したものです。そこでまず、左側の図を見ていただくと、前方後円墳に比べて前方後方墳の数はかなり少ないことがわかります。現在、前方後円墳は全国に5千基ほどあると言われていますが、この時の集計によると、前方後方墳は全国で512基です。そして、その中の326基が東日本に分布しているという点に大きな特徴があります。また、規模について見ると、よく知られているように前方後円墳には非常に規模の大きなものがあり、墳丘の長さが200mを超える計37基はすべて前方後円墳です。一方、前方後方墳として一番大きなものは奈良県の西山古墳で、墳丘の長さはおよそ180mです。あとで出でますが、前方後方墳として墳丘の長さが100mを超えるものは、全国で11基しか知られていません。したがって、浅間古墳はそれに次ぐ規模の前方後方墳と言えるわけです。

ところで、前方後方墳が築かれた時期ですが、古墳時代を大きく前期・中期・後期に分けた場合、ほとんどのものが古墳時代前期に築かれています。古墳時代中期以降のものはごくわずかで、古墳時代後期のものは出雲地域、現在の島根県に比較的大きなものがみられますが、きわめて例外的な存在です。前方後方墳はほとんどのものが古墳時代前期に属していて、具体的な年代で言いますと、3世紀から4世紀にかけて多数築かれています。しかもそれらの大半が、東日本に分布しているという点に大きな特徴があります。

じつは、古墳時代が始まつて間もない古墳時代前期前半には、西日本に大きな前方後円墳が築かれるわけですが、東日本ではそれと同じ頃、多くの地域で前方後方墳が築かれているという状況がわかってきます。ところがその後、古墳時代前期後半になりますと東日本でも前方後円墳が築かれるようになり、前方後方墳は次第に築かれなくなっていくという変化をたどります。そこで、前方後方墳について考古学的に研究する際には、ある一時期に限って多く築かれる前方後方墳はどのように成立してきたのか、なぜ東日本に多く分布するのか、そしてそこに葬られた人物はどのような性格を有するのか、という点が注目されるわけです。



第5図 前方後円墳・前方後方墳の地域別分布と規模別分布

II 駿河・伊豆の前期古墳

前期古墳の分布

次に二つ目のテーマである「駿河・伊豆の前期古墳」についてお話ししたいと思います。

第6図は、現在の静岡県の中部から東部、旧国で言いますと、駿河の中部から東部そして伊豆の北部までの地図に、現在までに判明している古墳時代前期の古墳をプロットしたものです。その分布状況から、この地域の前期古墳は大きく5つのグループに分けて見ることができます。西から、静岡地域のグループ、清水地域のグループ、浅間古墳を含む富士地域のグループ、それから高尾山古墳などを含む沼津地域のグループ、そして北伊豆地域のグループです。以下では主に東駿河、そして北伊豆の状況について見ていきたいと思います。

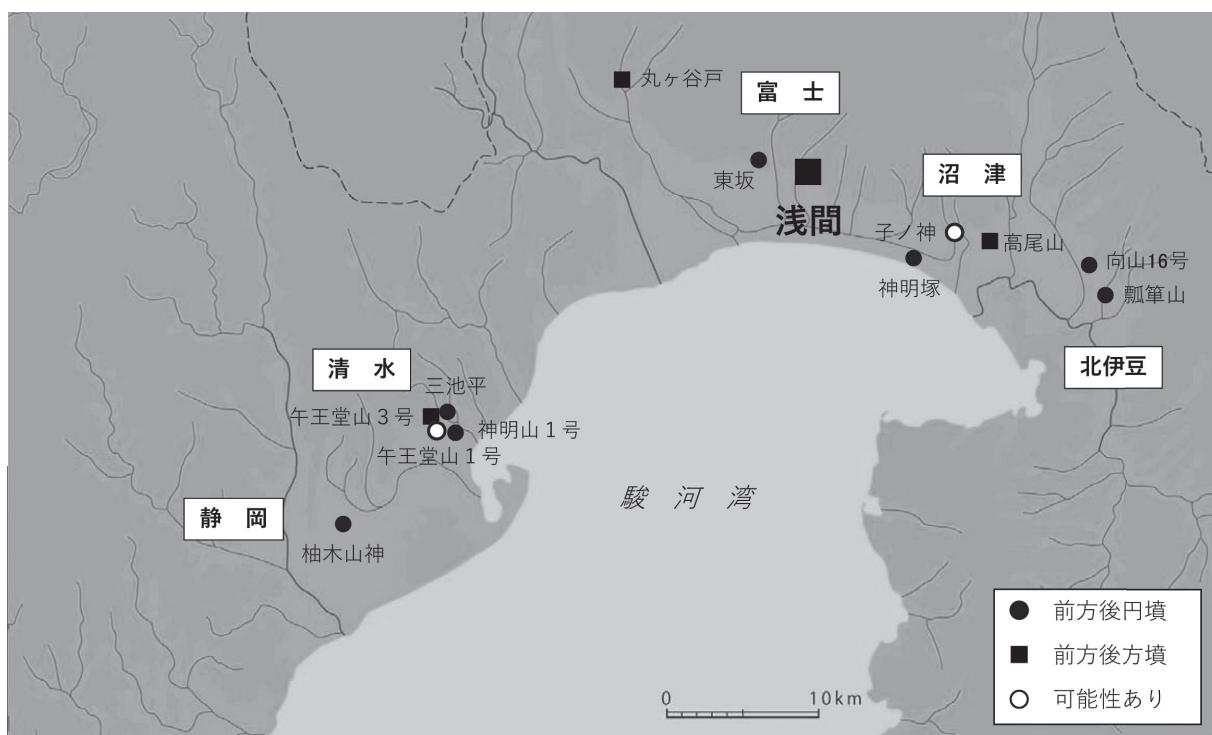
まず紹介するのは、富士宮市丸ヶ谷戸遺跡で発掘調査された前方後方形の墓です（富士宮市教育委員会 1991）。第7図に示したような前方後方形の墓で、墳丘の長さは26.2mです。ただし、墳丘はすでに削平されていて、周溝だけが見つかっています。周溝の中からは多数の土器が出土していますが、その中には在地の土器のほかに東海西部地域の土器や畿内地域の土器、そして北陸地域の土器などが含まれ

ています。この墓は、在地の有力者の墓と思われますが、そうした土器のあり方から、外部地域との交流関係の中で成立した墓であろうと考えられます。

ただし、この墓は先ほど紹介した5つのグループとは離れた内陸部の富士宮地域に所在していて、その後に続くような古墳は見当りません。年代的には、弥生時代終末期あるいは古墳出現期といわれるような時期に位置づけられ、これからお話しするその後の古墳とは一線を画した存在であると考えられます。

高尾山古墳

丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形墓に遅れて築かれたとみられるのが、沼津市の高尾山古墳です。近年の調査によってたいへん有名になりましたが、この古墳は浅間古墳と同じく前方後方墳で、調査の結果、墳丘の長さは62.2mであることが確かめられています（第8図、沼津市教育委員会 2012）。この古墳の年代については、研究者によっていろいろな意見が出されています。具体的には、古墳の周りに掘られた溝の中から出土した土器の中で比較的年代が古く遡るものをどのように考えるか、という点で意見が分かれています。私は、この古墳の調査成果をまと



第6図 駿河・伊豆における前期古墳の分布

めた報告書の中で副葬品について検討させていただきましたが、その内容から判断して、少なくとも埋葬は3世紀中ごろに行われたと考えています（滝沢・平林2012）。いずれにしても、60m規模の前方後方墳としては、東日本において最古のものの一つであると言って間違いありません。同様の時期に属する前方後方墳としては、長野県松本市の弘法山古墳、千葉県木更津市の高部30号墳、同32号墳の3基が知られていますが、それらと並んで東日本では最古段階の前方後方墳に位置づけられるものです。

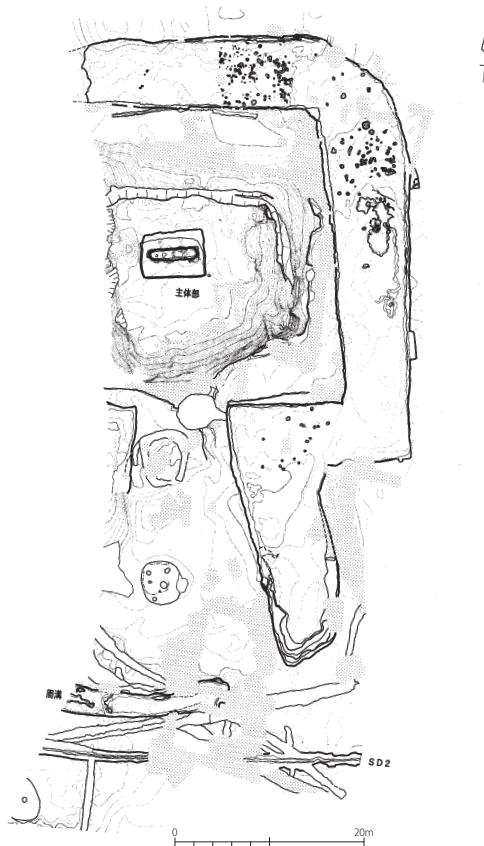
前期の前方後円墳

東駿河及び伊豆の地域では、富士宮地域にまず丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形墓が築かれ、その後沼津地域に高尾山古墳が前方後方墳として築かれます。そして、それからさほど時を経ずに沼津市の海岸沿いに前方後円墳である神明塚古墳が築かれたとみられます。写真4は、神明塚古墳を側面から撮影したもので、左側が後円部で、墳頂部には神社のお社が建っています。右側の低い方は前方部で、手前側に走っている線路は東海道線本線です。この古墳は田子の浦砂丘上に築かれていて、1980年代に沼津市教育委員会によってかなり多くの部分が発掘調査されました。当時はこの古墳の年代を古墳時代中期後半と考えていました（沼津市教育委員会1983）。ところが2000年代に入り、私がかかわっていた『沼津市史』の編纂に際して、この古墳の発掘調査をあらためて行いました。その結果、写真5のような土器の破片が出土しました。じつは、同じような土器の破片は1980年代の調査によっても出土していました。それらを含めて復元すると、第9図のようないわゆる底部穿孔の二重口縁壺であることがわかりました。これによって、神明塚古墳はこれまで考えられていたような古墳時代中期後半の前方後円墳ではなく、古墳時代前期の中でも比較的古い時期の前方後円墳であることが明らかになったのです（沼津市教育委員会2005）。

この神明塚古墳は、前方部が非常に短いという点に大きな特徴があります（第10図）。墳丘の長さは約52mですが、後円部の直径に対して前方部の長さがおよそ二分の一という比率をもっています。



第7図 富士宮市丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形墓
(墳丘長 26.2 m)



第8図 沼津市高尾山古墳 (墳丘長 62.2 m)

こうした短い前方部を有する古墳は、寺沢 薫さんがごく初期の古墳の形態として「纏向型前方後円墳」と名付けたものに非常によく似ています（寺沢 1984 など）。寺沢さんはその後も纏向型前方後円墳について議論を進められ、2011年に刊行された著書の中では、神明塚古墳を纏向型前方後円墳の一つとして取り上げています（寺沢 2011）。第11図がその際に示された図で、黒塗りで示されているもの

が古墳時代の中でもごく初期の纏向型前方後円墳、灰色で示されているものが古墳時代前期の中でも少し後の時期のものとされ、後者の一つとして神明塚古墳が示されています。纏向型前方後円墳の性格については多くの議論がありますが、神明塚古墳がこうした古墳のグループに属するとすれば、それはどのような意味をもっているのかという点も、この地域の前期古墳について考える際に重要なポイントに



写真4 沼津市神明塚古墳（北側から）

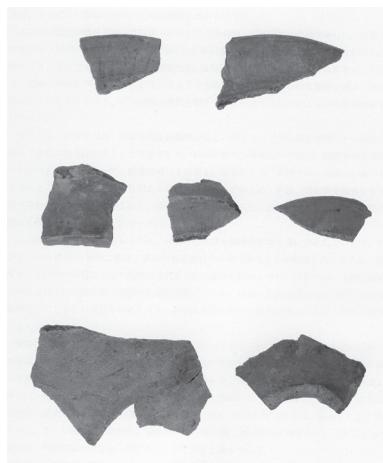
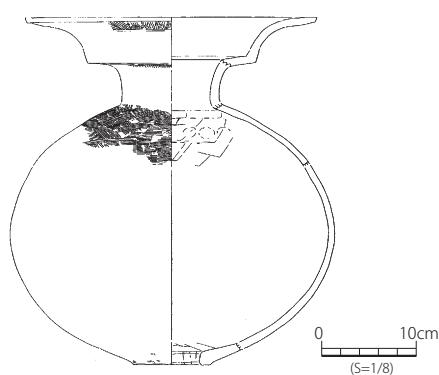
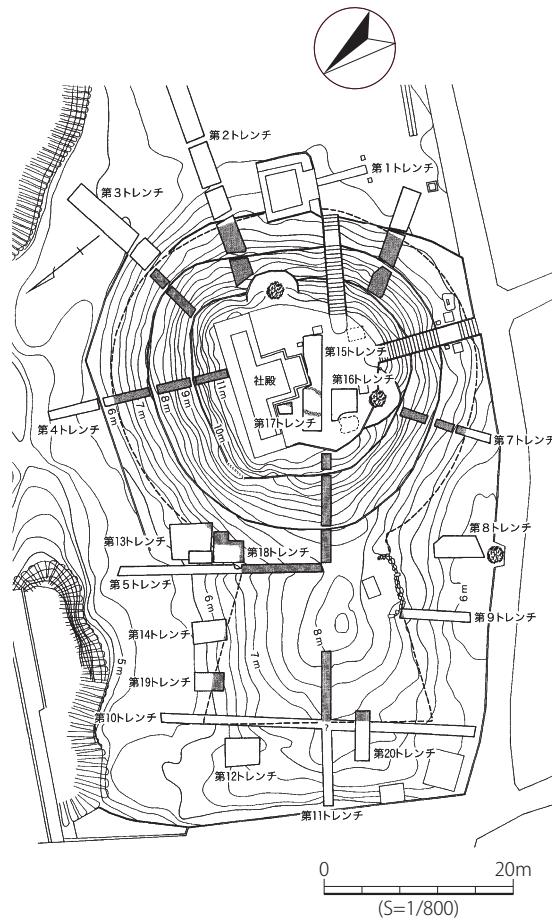


写真5 沼津市神明塚古墳出土の土器片



第9図 沼津市神明塚古墳出土底部穿孔二重口縁壺の復元図



第10図 沼津市神明塚古墳（墳丘長52.5m）

なると思います。

このように、沼津地域ではまず前方後方墳として高尾山古墳が築かれ、その後海浜部には神明塚古墳が前方後円墳として築かれます。そして、高尾山古墳のすぐ近くの丘陵上には 子ノ神古墳という墳丘長約 64 m の前方後円墳が知られていますが、子ノ神古墳も神明塚古墳と同じように前方部が短いタイプの前方後円墳ですので、古墳時代前期に遡る可能性があります。そうしますと、沼津地域では高尾山古墳のあと、神明塚古墳が築かれ、場合によっては子ノ神古墳がそれに続くというかたちで、2 基の前方後円墳が連続的に築かれた可能性も考えられるのです。

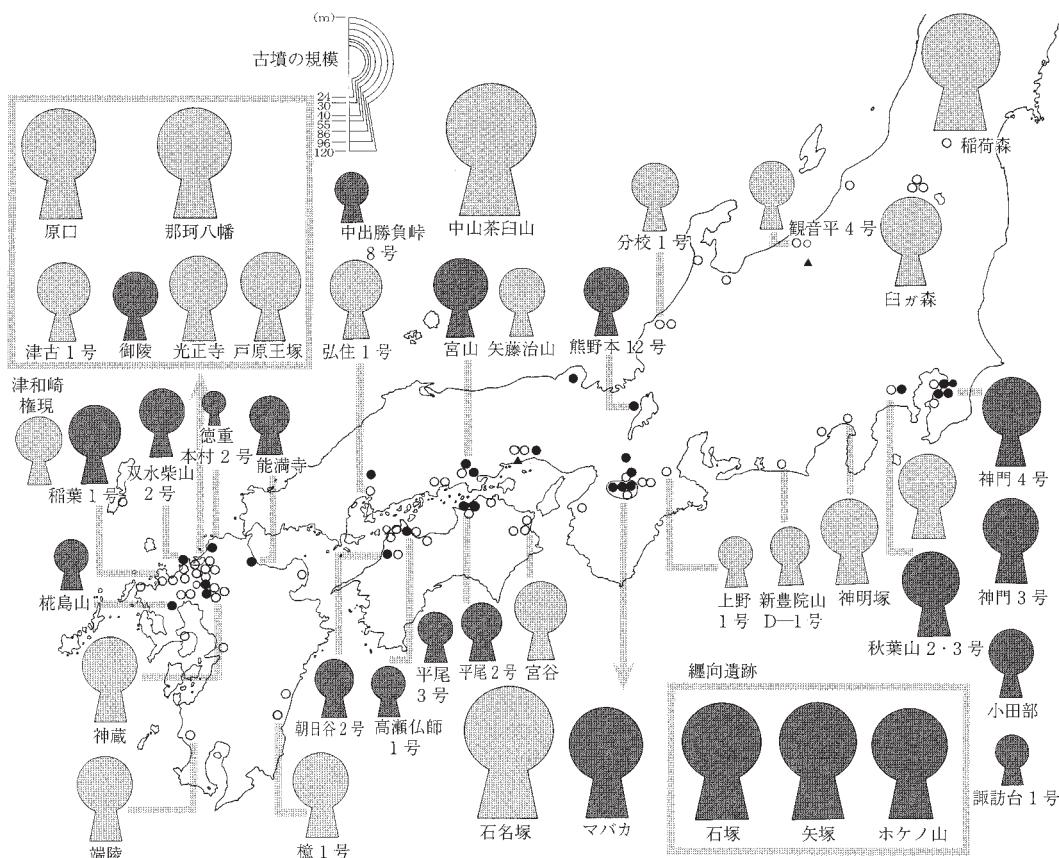
北伊豆における前期古墳の発見

東駿河と伊豆では、内陸部の富士宮市に前方後方形の墓がまず築かれますが、それは単発的であとに続きません。その後、沼津地域に古墳時代の初頭に遡る古い前方後方墳が築かれ、それに続いて前方後円墳が築かれていることがわかつってきたのですが、

東側に隣接する伊豆の地域ではこれまで古墳時代前期の大型古墳は知られていませんでした。しかし、いまから20年ほど前に、従来の認識を大きく覆す発見がありました。それが、三島市向山16号墳の発見です。

向山 16 号墳は、その後三島市教育委員会によって何度も発掘調査が行われていて、墳丘の長さが約 68 m の前方後円墳であることがわかってきています（三島市教育委員会 2015）。第 12 図は、これまでの調査成果にもとづいた復元図で、写真 6 は上空から撮影した墳丘の写真です。そして写真 7 は、後円部の墳頂部で確認された竪穴式石槨の様子です。

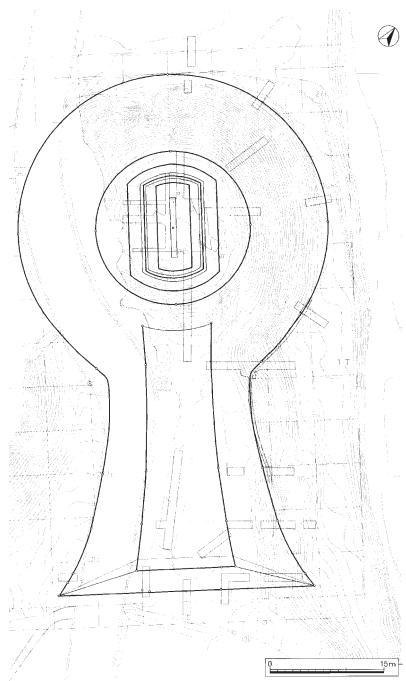
この竪穴式石槨は、トレンチ調査によって確認されたもので、上部構造の一部しかわかつていませんが、非常に衝撃的な発見でした。じつは、古墳時代前期の竪穴式石槨は、太平洋岸では静岡平野あるいは清水平野の地域が東限であると考えられてきました。それがこの発見によって、北伊豆の地域にまで分布を広げているということがわかったのです。そして、最新の地中レーダー探査の結果、同じような



第 11 図 初期纏向型前方後円墳の分布

竪穴式石槨がどうも浅間古墳にも存在するらしいということがわかつてきました。この向山16号墳は、わずかに出土している土器の型式から、古墳時代前期後半の中では少し古く、古墳時代前期中頃あたり

の古墳ではないかと考えられますので、北伊豆地域では沼津地域よりも遅れて大きな古墳が築かれるようになつたと言えそうです。



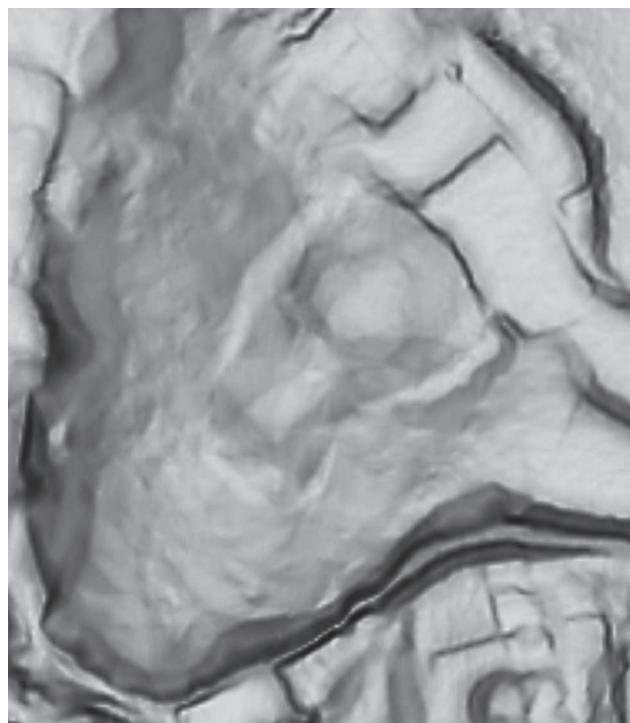
第12図 三島市向山16号墳
(墳丘長 68.2 m)



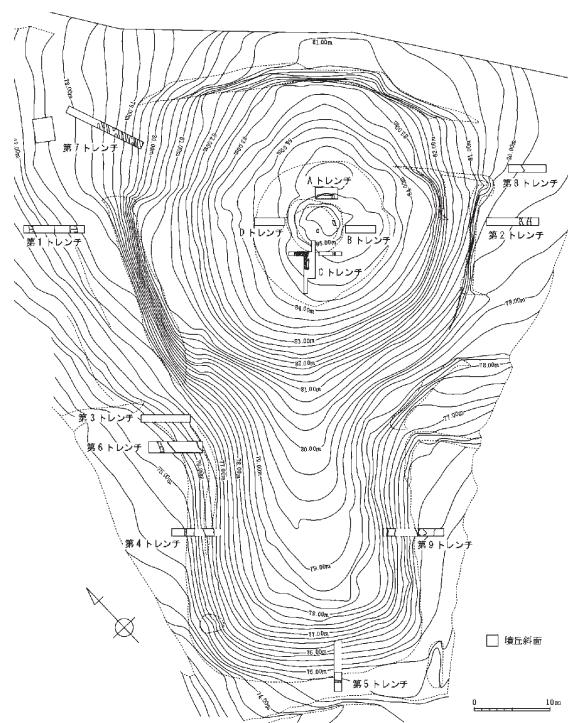
写真6 上空から見た三島市
向山16号墳



写真7 三島市向山16号墳の
竪穴式石槨



第12図 函南町瓢箪山古墳の赤色立体図



第14図 函南町瓢箪山古墳（墳丘長約87m）

伊豆半島最大の前期古墳

北伊豆地域では、近年になってさらに新しい成果が得られました。それは、函南町に以前から存在することが知られていた瓢箪山古墳についてです。瓢箪山古墳の実態は長らく不明のままでしたが、近年伊豆半島全域で行われた航空レーザー測量によって、第13図に示したような古墳の姿が確認され、その後現地の測量調査を実施した結果、第14図のように非常に大きな前方後円墳であることがわかりました（滝沢・山下・河嶋2018）。

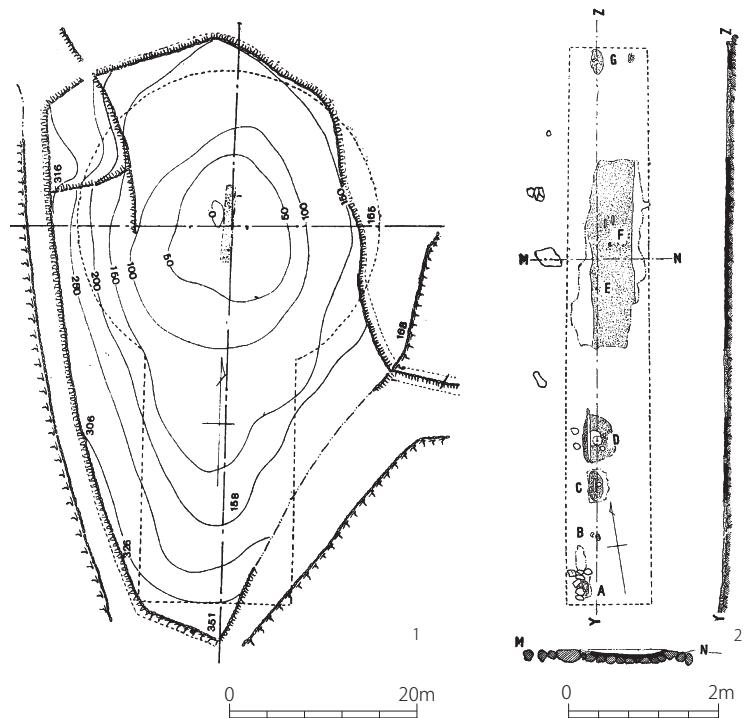
この測量調査は私の研究室が行いましたが、その後3年にわたって墳丘の発掘調査も実施しました。その成果をもとに復元した墳丘形態やわずかに出土した土器の破片などから推測すると、瓢箪山古墳は古墳時代前期後半に築かれた、墳丘長約87mの前方後円墳であると考えられます。静岡県東部の範囲では、浅間古墳に次ぐ規模の古墳で、伊豆半島では最大の古墳です。ここでは詳細な説明を省きますが、この古墳は墳丘の西側面を一段大きく造っているところに大きな特徴があります。じつは、この古墳の西側には、伊豆半島を横断する主要なルートが通っていて、そちらから見える側面を一段大きく造ったのではないかと思われるのです。

瓢箪山古墳は、三島市の向山16号墳と比較的近い位置にありますが、北伊豆地域であらたに確認された2基の前期前方後円墳は、それまで前期古墳が存在しないとされてきた北伊豆地域の古墳時代史を大きく塗り替えることになりました。このことは、浅間古墳を含む東駿河・伊豆の前期古墳を考えていく上でも非常に重要な意味をもっています。今回のテーマである浅間古墳は、以上に紹介した北伊豆の向山16号墳や瓢箪山古墳と比較的近い時期に築かれた可能性があります。おそらく、向山16号墳より若干新しく、瓢箪山古墳より若干古いのではないかと推測しているところです。

浅間古墳のあと

さて、浅間古墳が築かれたあの富士地域では、浅間古墳よりも西側の丘陵上に東坂古墳が築かれたとみられます。この古墳はすでに消滅してしまいましたが、かつて行われた発掘調査の際に第15図-1のような墳丘の様子がとらえられています。この図は古い測量図ですので、そこから墳丘の正確な形を知ることは難しいのですが、当時の報告書ではこの図にあるような点線で前方後円墳の形が復元されています（後藤1958）。

東坂古墳では、学校の建設工事にともなって発掘調査が行われたのですが、その際、墳丘の中心部で発見された埋葬施設からは第15図-2のような配置で副葬品が出土しています。当時の報告書では、この副葬品の配置から、被葬者は頭を南側に向けて埋葬されていたのではないかと記しています。ちょうどこの図のDにあたる部分から鏡などが出土しましたので、どうも頭を南に向けていたのではないかということです。この古墳は墳丘の長さが約60mの前方後円墳とされているわけですが、そうなると被葬者は頭を前方部側に向けていたことになり、前方後円墳としてはやや異例なものとなります。そのあ



たりの問題は残りますが、副葬品の内容から判断すると、この古墳は古墳時代前期末頃に築かれたと考えられますので、浅間古墳に後続して築かれた富士地域の有力な古墳とみて差し支えないと思います。

前期古墳の変遷

第16図は、これまでお話してきた古墳を年代順に整理したものです。この図では古墳時代前期の古墳を示していて、左側から西駿河の地域、そして東駿河の地域、北伊豆の地域というかたちで、西駿河の地域についても併せて示しています。したがって、図の中央より右側の部分が今回取り上げた地域になります。この図を見てわかるように、今回取り上げた地域の中では、まず富士宮に丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形墓が築かれますが、古墳時代の初頭には沼津

地域に高尾山古墳が築かれ、それに続いて神明塚古墳、あるいは子ノ神古墳も築かれた可能性があります。さらにそれらに遅れて、北伊豆地域では向山16号墳や瓢箪山古墳が築かれていることがわかつてきました。そして、それとほぼ同じ頃に富士地域では浅間古墳が築かれ、その後東坂古墳が築かれたと考えられます。

2000年代以前、東駿河と伊豆の地域で前期古墳として明確に知られていたのは、富士地域の浅間古墳と東坂古墳だけでした。ここで紹介したそれ以外の古墳は、すべてこの20年ほどの間に発見されたり、その評価が変わったりした前方後円墳や前方後方墳です。このように、東駿河と伊豆では、新しい調査成果によってこれまで考えられていた古墳時代前期とはかなり違った様相が明らかになってきたのです。

| 時期区分 | 集成編年 | 和田編年 | 西駿河 | | | 東駿河 | | 北伊豆 | |
|------|------|------|---------|------------------|------|-----------------|---------------------|------------|----------------|
| | | | 志太地域 | 静岡地域 | 清水地域 | 富士地域 | 沼津地域 | 北伊豆地域 | |
| 前期 | 1 | 1 | | | | | 丸ヶ谷戸 | | |
| | 2 | 2 | 旗指3号 | 小深田西1号 小深田西2号 | | 神明山1号 午王堂山3号 | | 神明塚 子ノ神 | 高尾山 |
| | 3 | 3 | 鳥羽美 | | 袖木山神 | 午王堂山1号 | | | 向山16号 向山14号 |
| | 4 | | 城山五鬼免1号 | | 三池平 | | 浅間 (船津古墳群) 東坂 | | 瓢箪山古墳 |

第16図 駿河・伊豆における前期古墳の変遷



写真8 低地部側から見た浅間古墳

III 大型前方後方墳としての浅間古墳

前方後方墳の起源

三つ目のテーマとして、「大型前方後方墳としての浅間古墳」について取り上げ、考察を深めていきたいと思います。

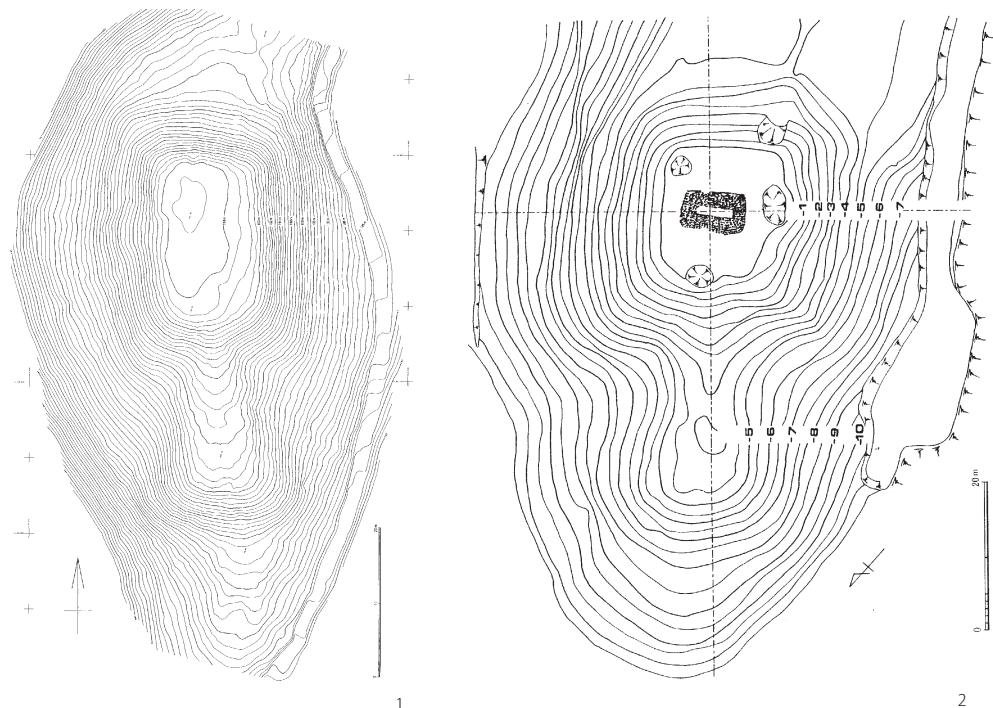
写真8の中央部には、浅間古墳がこんもりとした森のように見えています。その背後には富士山が見えていますが、この写真はつい最近私が撮影したもので、手前側の低地部分から浅間古墳の方を見上げて撮ったものです。いまはこのように森のようにしか見えませんが、この古墳が築造された当時は、低地部側から古墳の側面がよく見えていたと思われます。浅間古墳は墳丘の長さが90mもありますから、ある程度遠いところからでも、木が生えていない状態であればよく見えていただろうと想像できるわけです。こうした古墳の見え方という点も含めて、大型前方後方墳としての浅間古墳はどのように考えられるのか、最後にお話ししてみたいと思います。

まず、前方後方墳というのはそもそもどこで始まったのかという点ですが、1980年代以降のさまざまな調査研究によって、今日では、いわゆる東海西部地域=濃尾平野を起源地として始まったのでは

ないか、それは弥生時代後期後半頃ではなかったか、ということが言われるようになってきました。ただ、近年では濃尾平野だけではなく、現在の滋賀県=近江地域にもその起源地が求められるのではないか、という意見があります。いずれにしても、その時期の前方後方形の墓は比較的規模が小さく、代表例として知られている愛知県廻間遺跡のSZ01や、愛知県の西上免古墳と言われている墓は、墳丘の長さが25～40mです。

前方後方墳の成立と変容

その後、古墳時代の初めになると、墳丘の長さが60m規模の前方後方墳が登場します。滋賀県小松古墳、長野県弘法山古墳がそれで、いずれも墳丘長はおよそ60mです（第17図）。また、やや古く位置づけられる千葉県木更津市の高部30号墳、同32号墳は、墳丘長30m台の前方後方墳です。沼津市の高尾山古墳は、それらの古墳とほぼ同時期に築かれた、最古段階の前方後方墳の一つと考えられます。詳しい説明は省きますが、ここではまず、これくらいの大きさの前方後方墳が明確に築かれるようになる段階があることを確認しておきたいと思います。



第17図 初期の前方後方墳

1: 滋賀県小松古墳（墳丘長60m） 2: 長野県弘法山古墳（墳丘長63m）

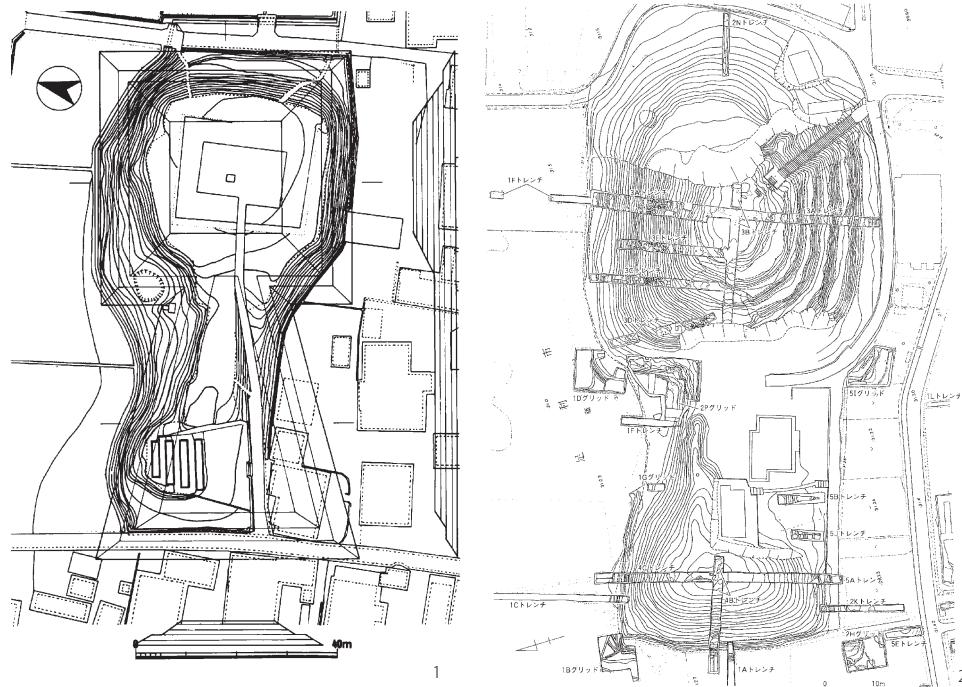
最古段階の前方後方墳に続いて、古墳時代前期前半の東日本では各地の有力者の墓として、次々に前方後方墳が築かれていきます。その墳丘長は、およそ40mから60m程度です。ところが、古墳時代前期の中頃から後半になると、墳丘の長さが80mを超える、あるいは100mを超えるような大型の前方後方墳が築かれるようになります。その代表的な例としては、岐阜県粉糠山古墳、栃木県藤本觀音山古墳、栃木県上侍塚古墳などがあり、それらはいずれも墳丘長100mを超える大型前方後方墳です（第18図）。

以上のような状況をふまえると、明確に前方後方形の墳丘をもつ墓は、大きく分けて四つの段階に整理することができそうです。まず、今回紹介した例で言えば、丸ヶ谷戸遺跡で確認されたような前方後方形墓が築かれる段階です。次に、沼津市高尾山古墳や長野県弘法山古墳、千葉県高部30号墳、同32号墳といった初期前方後方墳が築かれる段階です。その後、古墳時代前期前半から中頃にかけて、40～60m規模の前方後方墳が東日本各地に築かれていく段階があります。そして最後に、いわゆる大

型前方後方墳が古墳時代中期から後半にかけて築かれる段階があります。およそこのような流れをたどるわけですが、その中で浅間古墳は最後の段階に登場する大型前方後方墳に属するものと思われます。そこで、大型前方後方墳の実態をもう少し詳しく見ていきたいと思います。

大型前方後方墳の特徴

じつは大型の前方後方墳は、大和盆地でも確認されていて、ヤマト王権の中枢域に営まれた大和古墳群の中にも前方後方墳の存在が知られています。しかもそれらは比較的大きな規模を有しています。第19図には5基の前方後方墳が示されていますが、その中の3基（波多子塚古墳、下池山古墳、フサギ塚古墳）はいずれも墳丘の長さが100mを超える前方後方墳です。それから、この地図の中にはありませんが、大和盆地の南西部には陵墓参考地となっている新山古墳という前方後方墳があります。こちらは墳丘長137mの前方後方墳で、たいへん有名な古墳です。これらの古墳は、大和古墳群の例を見てもわかるように、前方後円墳といわば同居するような



第18図 大型前方後方墳

1：岐阜県粉糠山古墳（墳丘長約100m） 2：栃木県藤本觀音山古墳（墳丘長約118m）

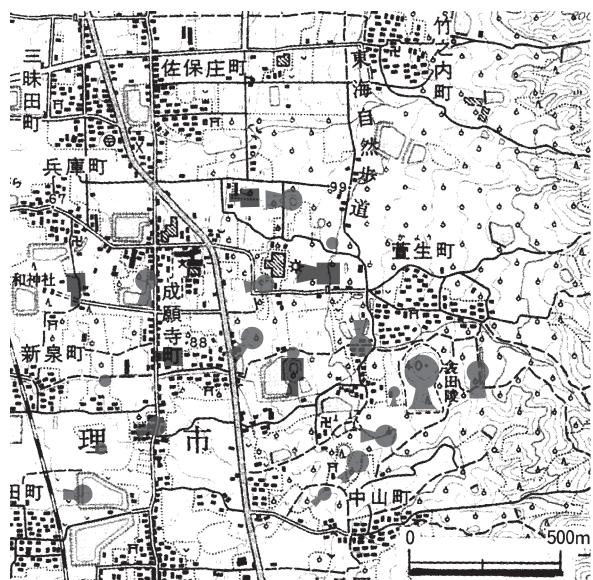
かたちで存在している点に大きな特徴があります。

第1表は、前方後方墳を規模順にベスト20まで示したもので、実際には同じ大きさのものがありますので、順位は19位までになりますが、ちょうどこの表で示したものさらに下位は墳丘長80m以下の前方後方墳となりますので、ベスト20が80m以上の前方後方墳ということになります。

さて、ここで注目しておきたいのは、これらを大型前方後方墳としてとらえるならば、そこで確認されている埋葬施設には堅穴式石槨が非常に多く認められるという点です。また、墳丘に葺石をともなっているものが大半である点も注目されます。そこで、この表の17番目に記されている浅間古墳について見ると、最新の調査によって墳頂部には堅穴式石槨があるらしいこと、これまでの測量調査などで墳丘の表面には葺石が存在するらしいことがわかっていますので、まさに大型前方後方墳の特徴を備えたものと言えるかと思います。

いまお話ししたように、大型前方後方墳では堅穴式石槨を採用するものが多く、葺石をともなうものが多いというのは、おそらく前方後円墳からの影響であろうと思います。それ以前の前方後方墳には典型的な堅穴式石槨や葺石は基本的に認められず、大

型前方後方墳では墳丘の大型化とともに、埋葬施設に堅穴式石槨が採用され、墳丘の表面に葺石が施されるようになったとみられます。また、墳丘の途中に段を設けて、いわゆる段築がともなうようになります。こうした変化は、いずれも前方後円墳からの影響であろうと思われます。つまり、最後の段階の前方後方墳は前方後円墳からの影響を強く受けていると考えられるのです。



第19図 奈良県大和古墳群中の前方後方墳

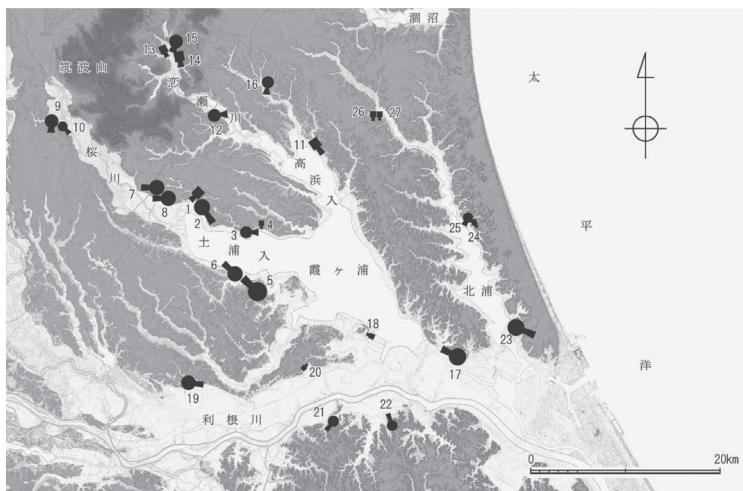
第1表 前方後方墳の規模ベスト20

| No. | 古墳名 | 所在地 | 墳丘長(m) | 時期 | 埋葬施設 | 葺石 |
|-----|----------|---------|-----------|----|--------|----|
| 1 | 西山古墳 | 奈良県天理市 | 183 | 前期 | 堅穴式石槨か | ● |
| 2 | 波多子塚古墳 | 奈良県天理市 | 147 | 前期 | 堅穴式石槨? | ● |
| 3 | 新山古墳 | 奈良県広陵町 | 137 | 前期 | 堅穴式石槨 | |
| 4 | 八幡山古墳 | 群馬県前橋市 | 130 | 前期 | 粘土槨? | ● |
| 5 | 下池山古墳 | 奈良県天理市 | 125 | 前期 | 堅穴式石槨 | ● |
| 6 | 藤本觀音山古墳 | 栃木県足利市 | 118 | 前期 | — | ● |
| 7 | 上侍塚古墳 | 栃木県大田原市 | 114 | 前期 | 粘土槨? | ● |
| 8 | フサギ塚古墳 | 奈良県天理市 | 110 | 前期 | — | |
| 9 | 柳田布尾山古墳 | 富山県氷見市 | 107.5 | 前期 | — | |
| 10 | 赤土山古墳 | 奈良県天理市 | 105 ~ 110 | 前期 | — | ● |
| 11 | 粉糠山古墳 | 岐阜県大垣市 | 約 100 | 前期 | — | ● |
| 12 | 山王寺大伴塚古墳 | 栃木県栃木市 | 96 | 前期 | 粘土槨 | |
| 13 | 西求女塚古墳 | 兵庫県神戸市 | 95 | 前期 | 堅穴式石槨 | ● |
| 14 | 元稻荷古墳 | 京都府向日市 | 94 | 前期 | 堅穴式石槨 | ● |
| 15 | 山代二子塚古墳 | 島根県松江市 | 92 | 後期 | — | |
| 16 | 植月寺山古墳 | 岡山県勝央町 | 91.5 | 前期 | — | ● |
| 17 | 浅間古墳 | 静岡県富士市 | 約 90 | 前期 | 堅穴式石槨 | ● |
| 17 | 元島名將軍塚古墳 | 群馬県高崎市 | 90 | 前期 | 粘土槨 | |
| 19 | 北山古墳 | 岐阜県大野町 | 84 | 前期 | ? | ● |
| 19 | 下侍塚古墳 | 栃木県大田原市 | 84 | 前期 | 粘土槨? | ● |
| 19 | 大安場古墳 | 福島県郡山市 | 84 | 前期 | 粘土床 | |

前期古墳の立地を考える

最後に、その点を少し別の角度から考えてみたいと思います。第20図は、私が継続的に調査を進めているフィールドの一つ、茨城県の霞ヶ浦沿岸地域における前期の前方後円墳及び前方後方墳の分布状況を示したものですが、近年それらの立地について詳しく検討する機会がありました（滝沢2020）。ご存じのように、霞ヶ浦は日本列島第2位の規模をもつ湖ですが、かつてはさらに広大な水域が広がっていました。そこでは水上交通が重要な交通手段になっていたと推測されるわけですが、それを物語るかのように、有力者の墓とみられる前期古墳の多くは水域に面した台地の縁辺部に築かれています。そこで、その立地を分類すると第21図のように分類することができます。その中から、ここでは典型的な二つケースについて取り上げておきたいと思います。

第21図の中でA類としたものは台地の縁辺部に築かれているケースですが、台地の方向に対して直交する方向に墳丘の主軸を向けているため、台地の下側から、つまり低地（水域）の方向から見上げた時に古墳の墳丘は一つの山のようにしか見えません。一方、B類としたものは、墳丘の主軸を台地の縁辺部と平行させていますので、低地（水域）側から見た時には、墳丘の側面が見えて、後円部と前方部、あるいは後方部と前方部という高さの異なる二つの山のように見えます。つまり、前方後円墳か前方後方墳かはわからないけれども、そのいずれかとしておよその規模を確認することができるような立地になっているわけです。

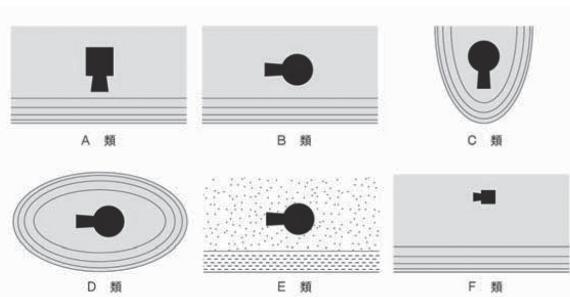


第20図 霞ヶ浦沿岸地域における前期古墳の分布

古墳の見え方

以上のことと端的に物語っているのが、第22図に示した土浦市の王塚古墳と后塚古墳です。この二つの古墳については3年ほど前から私の方で発掘調査を進めています。おそらく前方後方墳である后塚古墳が先に築かれて、その後ほとんど年代差なく前方後円墳である王塚古墳が築かれたとみられます。第21図の分類で言いますと、后塚古墳はA類、王塚古墳はB類に分類されます。后塚古墳の場合は、霞ヶ浦方向からは一つの高まりにしか見えず、それが前方後方墳なのか前方後円墳なのかという以前に、場合によっては円墳や方墳にしか見えないような立地になっているわけです。一方、王塚古墳は墳丘の側面を霞ヶ浦方向に向けて築かれていますので、それなりに大きな規模感をもって低地側から認識できるような立地になっています。

この地域では前方後方墳自体が少ないため確かなことは言えませんが、霞ヶ浦沿岸地域で確認されている前方後方墳について見ると、基本的にA類のような立地が認められます。ただし、例外的なもの



第21図 立地の分類



第22図 墳丘主軸を異にする前方後円墳と前方後方墳

として、B類の立地をとる勅使塚古墳という前方後方墳がありますが、この古墳は前方部の長さが非常に長く、出土している壺形埴輪は古墳時代前期の終わり頃に位置づけられますので、前方後円墳の影響を受けている可能性があります。そのように考えるならば、前方後方墳は主要な交通路（水路）に対して直交する方向に築かれているのに対して前方後円墳の多くは側面を向けて築かれているという大枠での捉え方ができそうです。

浮島ヶ原ルートと狩野川ルート

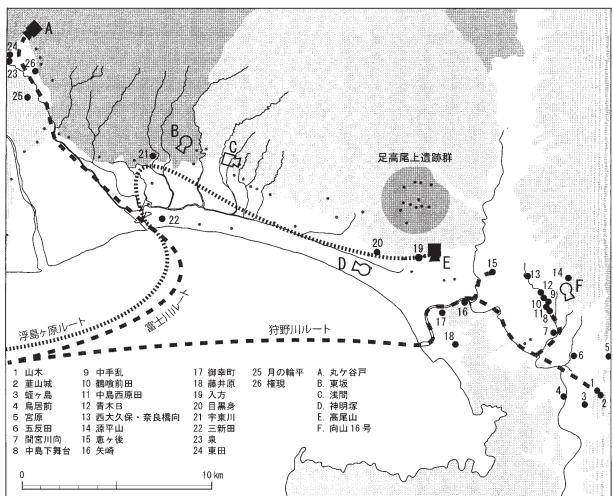
ここで紹介した霞ヶ浦沿岸域での理解は、浅間古墳が存在する東駿河の地域とはかけ離れていて関係のないことのように思われるかも知れませんが、私自身は、広く太平洋岸に想定されているルート（佐藤 2012）に關係するものと考えています。そこで、同様の視点で東駿河と伊豆の前期古墳を考えてみたいと思います。

第23図は、先ほど取り上げた東駿河と伊豆の前期古墳をプロットしたものです。ここでは、およその墳丘主軸方向もわかるように示しています。弥生時代の終わりごろから古墳時代前期にかけてのこの地域における主要な交通路については、集落遺跡の分布や集落遺跡から出土した外来系の土器の分布状況から推測されています。第24図として示したのは、高尾山古墳の発掘調査報告書の中で岩本 貴さんが提示された図です。そこで推定されているよう

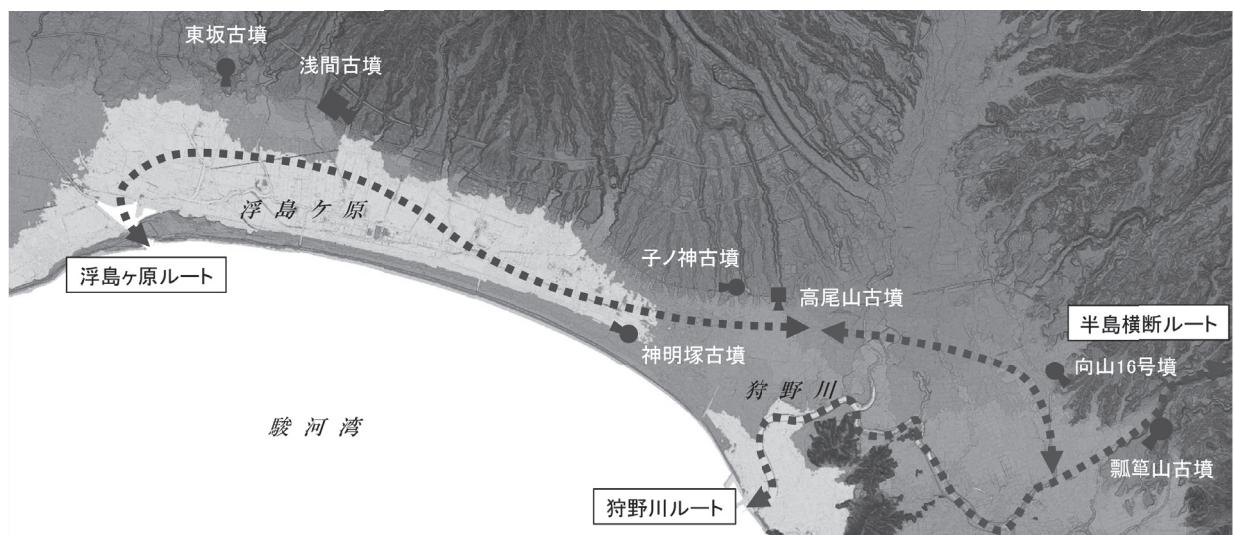
に、この地域の主な交通路としては、まず「浮島ヶ原ルート」と呼ばれている、田子の浦付近からかつて水域が展開していた浮島ヶ原に水路で入ってきて沼津方面に抜けていくルートが考えられます。それとは別に、「狩野川ルート」と呼ばれている、狩野川の河口域から狩野川流域を遡って伊豆半島の北部に至るルートが考えられます。また、この二つのルート以外にも、富士川流域を遡っていく「富士川ルート」が想定されています（岩本 2012）。

前期古墳と交通路

こうした主要な交通路と前期古墳の立地について見てみると、高尾山古墳は浮島ヶ原ルートに対して直交する方向に築かれた前方後方墳であるという点



第24図 外来系土器分布および波及経路想定図



第23図 東駿河・伊豆の主要ルートと前期古墳

に気付かされます。先ほどお話しした霞ヶ浦沿岸の前方後方墳に見られるA類のようなあり方と言つていいでしょう。ところが、その後に築かれた神明塚古墳や、古墳時代前期に遡る可能性がある子ノ神古墳はB類に分類され、墳丘の側面を低地部側に向けて築かれています。そこで、浅間古墳について見てみると、前方後方墳ではあるものの、墳丘の側面を低地部側に向けて築かれています。しかも、非対称形の墳丘構造をもつていて、低地部側、すなわち浮島ヶ原の側を大きく見せるような造りになっています。

このような視点からとらえてみると、浅間古墳が前方後円墳の影響を受けて成立したであろう大型の前方後方墳であるという点は、こうした交通ルートとのかかわりの中でも理解することが可能と思われます。もう一つの狩野川ルートは、浮島ヶ原ルートよりも少し遅れて整備されていくと思われますが、それとは別に高尾山古墳のあたりから北伊豆の方に延びていくルートもあるだろうと推測しています。こうした目で見ますと、三島市の向山16号墳はそのルート上に位置づけられ、函南町の瓢箪山古墳は狩野川ルートの延長線上に位置づけられます。そして、それらはいずれも主要な交通路に対して墳丘の側面を向けるかたちで築かれた前方後円墳であると言えそうです。

以上の理解を浅間古墳にあてはめるならば、浅間古墳はその墳丘形態こそ前方後方墳ではあるものの、あらたな調査によって推定されるようになった竪穴式石槨の存在、葺石や段築とともにう墳丘構造、そして低地部側に側面を向けて墳丘自体を大きくみせるような造りは、いずれも前方後円墳的であると言えます。とりわけ非対称形の墳丘構造は、主要な交通路に対して側面を向けるという意識にかかわるもので、前期中頃以降の前方後円墳につうじる要素であることを指摘しておきたいと思います。

まとめ

最後に全体をまとめて終わりたいと思います。

今回お話ししたように、富士市による最新の調査によって、浅間古墳には竪穴式石槨が埋葬施設として採用されているらしいこと、従来から言われてき

たような非対称形の墳丘形態をもつことなどが、より具体的にわかつてきました。今後はそうした内容をさらに詳細に確認するための発掘調査をぜひ進めていただきたいと思います。もちろん浅間古墳は国の史跡として貴重な文化財ですので、可能な範囲で必要最小限の発掘調査を行って、その実態解明がさらに進むことを期待しています。

また、東駿河や伊豆の地域では、これまで知られていなかった前期古墳の存在がここ15年から20年の間に次々と明らかになってきました。それにより、この地域における古墳時代の理解は大きく変わりつつあります。浅間古墳の歴史的評価を考える際にも、この点はぜひ押さえておくべきポイントであると思います。

加えて、古墳時代前期後半の前方後円墳は、墳丘の側面を「見せる」ということに大きな意識をおいて造られているらしいという点も浅間古墳の性格を考える上で重要なポイントです。浅間古墳は前方後方墳ですが、その諸要素には前方後円墳からの影響がうかがえ、墳丘の側面を低地部側に向いているという点も前方後円墳的です。しかも、こうした墳丘の造りは、当時の交通路のあり方とも関係している可能性があります。この地域に即して言えば、浮島ヶ原のルートが先行し、それに遅れて狩野川ルート、そしてそこから半島を横断していくルートが整備されていくと思われますが、こうした交通路の変遷も古墳時代前期前半から後半にかけての社会の変化を反映しているのだろうと思います。墓制としては前方後方墳から前方後円墳へという変化が認められるわけですが、その背景には主要な交通路の変化がともなっている可能性があり、こうした点を考える上でも浅間古墳は非常に興味深い存在であると考えています。

今回の私の講演は以上となります。ご清聴どうもありがとうございました。

(本稿は、「浅間古墳と古墳時代前期の東日本」と題して2021年3月に動画を公開した講演の内容を基本としたものですが、その主旨に沿いながら表記の統一や表現の修正を行なっています。)

参考文献

- 足利市教育委員会 2005『藤本觀音山古墳発掘調査報告書I』
 足立 鍾太郎 1927「最近に調査したる駿東富士の古墳につきて」『静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3輯 静岡縣
 足立 鍾太郎 1930『静岡縣史』第1卷 静岡縣
 足立 鍾太郎ほか 1921『静岡県史蹟名勝誌』静岡縣
 岩本 貴 2012「東駿河～伊豆北部の外来系土器について」『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会
 大垣市教育委員会 1992『粉糠山古墳—範囲確認調査報告書—』
 小川町教育委員会 2003『那須小川古墳群』
 斎藤 忠 1979『日本考古学史資料集成1 江戸時代』吉川弘文館
 佐藤 祐樹 2012「駿河における前期古墳—古墳の景観と路の視点から—」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』東北・関東前方後円墳研究会
 静岡大学人文学部考古学研究室 1998「静岡県富士市国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』静岡県教育委員会
 高月町教育委員会 2001『古保利古墳群第1次確認調査報告書』
 滝沢 誠 2020「古墳の立地と視認性—霞ヶ浦沿岸域の前期古墳をめぐって—」『世界と日本の考古学』六一書房
 滝沢 誠・平林 大樹 2012「副葬品から見た高尾山古墳」『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会
 滝沢 誠・山下 優介・河嶋 優輝 2018「伊豆半島における前方後円墳の調査」『筑波大学先史学・考古学研究』第29号
 寺沢 薫 1984「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『樞原考古学研究所論集』第6吉川弘文館
 寺沢 薫 2011『王権と都市の形成史論』吉川弘文館
 内藤 晃 1958「遠江・駿河の前方後方墳」『私たちの考古学』
 第5巻第1号
 奈良県立樞原考古学研究所附属博物館 2004『前方後方墳—もう一人の主役—』
 沼津市教育委員会 2005『神明塚古墳（第2次）発掘調査報告書』
 沼津市教育委員会 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』
 富士宮市教育委員会 1991『丸ヶ谷戸遺跡』
 松本市教育委員会 1978『弘法山古墳』
 三島市教育委員会 2015『三島市埋蔵文化財発掘調査報告』補助事業版第1号
 吉原市教育委員会 1958『吉原市の古墳』

図・表・写真の出典

- 第1図：足立 1930 第2図：内藤 1958 第3図：静岡大学人文学部考古学研究室 1998 第4図：小川町教育委員会 2003 第5図：奈良県立樞原考古学研究所附属博物館 2004
 第6図：筆者作成 第7図：富士宮市教育委員会 1991
 第8図：沼津市教育委員会 2012 第9・10図：沼津市教育委員会 2005 第11図：寺沢 2011 第12図：三島市教育委員会 2015 第13図：静岡県CS立体図より 第14図：滝沢・山下・河嶋 2018 第15図-1・2：吉原市教育委員会 1958
 第16図：筆者作成 第17図-1：高月町教育委員会 2001
 第17図-2：松本市教育委員会 1978 第18図-1：大垣市教育委員会 1992 第18図-2：足利市教育委員会 2005 第19図：奈良県立樞原考古学研究所附属博物館 2004 第20図～22図：滝沢 2020（一部改変） 第23図：筆者作成 第24図：岩本 2012
 第1表：筆者作成
 写真1：足立 1930 写真2：筆者撮影 写真3：斎藤 1979
 写真4：筆者撮影 写真5：沼津市教育委員会 2005 写真6～8：筆者撮影

(筑波大学人文社会系)